

## 国民性と環太平洋連帯構想

林 知己夫

人は色めがねなしにものを見ることは困難である。これにこだわり過ぎると、その人の見方は偏見に満ちたものになる。とは言っても色めがねなしには、人はものを見ることができない。色めがねとは「ある立場」「ある見方」「ある仮説」と言い換えてもよい。自分は色めがねを持ちながら、それが一つの色めがねに過ぎないことを意識していない場合が多いから、問題が起ってくるのである。多くの色めがねのあることを承知して、いろいろな色めがねを使ってものを探りつつ見ることが大事であると思う。常に自分の見方は「一つの色めがねである」ことを、心得ていることが大事である。「今の立場がよい立場である」と思っても、これに固執することなく他の立場からも、ものを眺めつつ事を按ずることが望ましい。これまで、多くの国際比較研究を試みながら考えてきた一つの帰結である。「良いと思うことでも、それを行う場合は程々」というファジーな感覚が大事ということである。

### 偏見に満ちた日本のアジア観

日本のアジアに対する見方は、正直に言えば、恐ろしく偏見に満ちたものである。「アジアは一つなり」に始まる偏見は、多くのあやまちを惹起した。これを称えた岡倉天心に悪意があるわけではなく、アジアの芸術になにか「ある共通したもの」を見出し、西欧との差異を考えての発言に過ぎなかったのではない

かと思う。西欧の芸術が高く、アジアの芸術が低いと見做される傾向への対抗意識も読みとれるのである。これが次第に拡大解釈され、「アジアの考え方は一つなのだ」、「アジアは一つになり得る」、「一つになつて、西欧のアジア支配の野望を断ち切らねばならない」という発想にまで展開してくる。これにナシヨナリズムが加わつて「日本はアジアの盟主なのだ」という考え方が、西欧への劣等意識の裏がえしとして生まれてきたように感じる。ここから、大東亜共栄圏の思想が生れ、この通りのことを実行しようとすることになる。このあたりは後に述べることにして、中国に対する偏見の思想をみよう。

これには、屈折したものがあつるように見える。中国の過去の文化の優れた点、日本が中国の過去の文化に非常に影響された、日本文化の先達という考え方が日本に強くある。このために、現実の中国に心酔し、遠くから見ると（あるいは自らのつくり上げた虚構のみを見て）向てもよく見える、あるいは解釈するという心酔型が生ずる。これが、いわゆる文化人・知識人に非常に多いタイプである。冷徹な眼で現実を見ようとしなくて、無意識か、あるいは意識的に強烈な色めがねから、ものを見ているのである。この頃は口にはいけないことなので言わない人が多いのであるが、中国へ戦争で行つた兵隊や商売の人達（庶民） 当時の言葉で言えばインテリではない というものであつた（が虚心に見た中国の現実から、これが中国蔑視の「チャンコロ」思想を生んだのである。日本の軍隊の上層部にも、この二つの考え方が屈折して入り込んでいたように私は感じていた。ある時は尊敬のイリュージョンを持ち、ある面で軽蔑するという屈折した中国観が、「日本の中国対応」の思想にあつたのではないか。こうした偏見が偏見と解らないほど日本の中国観は二つの思い入れが強過ぎるのであり、文化人、知識人、ジャーナリスト等の書いたものを見ると、今日においてもあまり変わりがなく極言できるのではないか。東南アジアについても、対外関係—ODAを含む—を見てみると、まさしく現実が把握されていないように思う。

どうしてこつという偏見を抜け出すことができないのか。私は、人文・社会科学の弱体さと人文・社会科

学によるものの方の訓練不足ということではないかと思う。このところをしつかりすることは、容易なことではない。イデオロギーに充ちた話は明快で解り易いのでこの甘口に安易に乗ってしまい、これに引きずられてしまうものと言つてよい。「どうものを見るか」ということを科学的に行うことは、非常に努力を必要とすることだし、多大の費用と日時をかけて、じっくりと多年月、積みあげて行かなければならないのである。出てきたことは、そう明快でないことも多いが、全くイデオロギーの埒外にあったことが、仄かに見えてくることも多い。何か煮え切らないところがあるが、はつと思つこともおぼろげながら見えてくる。これが現実の姿なのである。割り切つてしまえば、それは嘘になつてしまつ。こつした見方に馴れてこないと、偏見はなかなか克服されないのである。

### 国際比較調査で重要な国民性

国際比較調査などを、このころ試みているが、ものの方、感じ方 (belief systems, the way of thinking, sentiments)、国民性という言葉で総括しているのであるが、これから何を考へるのにも、非常に大切。これが欠如すると致命的な間違いを犯してしまふ。なものであることに気が付いてきた。国際関係の現実場面において、諸外国の行動を解釈したり予測することにおいて、また、国際相互理解を推し進める上においても、欠くことのできないものである点が見えてきた。さらに、過去の文化の興亡、文明の盛衰を見る上においても大事な観点であるし、日本の将来をどうするかについても欠くことのできない知恵となつていゝことも明らかなのである。それなら、国民性で何でも解決できるかといふと、これも一つの偏見である。大事な見方であるし、大切な情報となるし、こつした調査結果を読むことも、偏見のない見方を形成するための知的訓練になるのである。このような複雑なもの、あいまいに見えるものを把えるのに、アメリカの社会科学の常套手段である「仮説をたててこれを検証する」という方法では、

一段と偏見が強まる虞れがある。どんな仮説をとるかで結果がおかしなところに偏在して、全般的にものが見えなくなってくるからである。

それではどうするか。現象を探索するという立場である。多くの仮説を持ち、それに応じてものを見る道具（社会調査では質問票の構成となる）を作り、その道具の性格を実証的に明らかにしつつ、これを用いて（社会調査ではデータの分析となる）現象を探索するということになる。色々な道具を用いて、珍しい道具を含めることも大事である。あちこち叩きながら、「ああでもない、こうでもない」「こうらしい、やはりそうだ、いやここが違う、ここは解った、この所が解らないので別の道具で調べよう」というふうに、いつなれば「医学的知見の上に立ち臨機応変に探る」外科的方法ということが出来る。道具や比較の対象をどうとって行くのが探索によいかは、考えなくてはならない。このため、連鎖的国際比較調査分析法（Cultural Link Analysis, CLAAと略称）という方法を考えている。似た所と異なる所を明らかにするのが比較調査研究であるから、いきなり明らかに違うものを比較するのは適切ではない。似た所と異なる所を鎖のように繋ぎながら、調査し、分析し、探ろうというわけである。対象の選び方もそうだし、質問の選び方もそうである。対象で言えば、例えば日本とアメリカを比較しようとするとき、ハワイの日系人、非日系人、アメリカ本土の日系人を間に加えて、似た所と異なる所を明らかにしつつ理解するという方法である。質問の方で言えば、日本で作った日本の発想の質問、アメリカで作ったアメリカ的発想の質問、近代産業社会に共通する質問（仕事観、科学文明観など）、共通する人間の基本的情感の質問（快・不快、喜怒哀楽、宗教に関するもの）を混合して、道具とするのである。

以上のような立場から、データをあちこち捻りまわしながら事を按じつつ探っていくのである。こうしているうちに、いろいろ見えないことも見えてきたのである。名付けて国民性の比較研究と言っている。偏見を少なくする訓練の場の提供というふうに考えていただいてもよい。

## 氣宇壮大で偏見のない環太平洋連帯構想

前置きが長くなり過ぎた。今、見ると大平首相の環太平洋連帯構想は、氣宇壮大で偏見のないものだと  
 思う。しかし以前、初めてその名を聞いたとき、正直言つて、大東亜共栄圏という言葉が頭を掠めた。大  
 東亜共栄圏は、字面から言つて悪いことと思わないし、アジアが手をつないで欧米支配とその野望を駆逐  
 して共に独立し、これに対抗するということは、「当時として」はおかしなことではなかつたと思う。し  
 かし、「大東亜共栄圏の思想」そのものは、偏見と思ひ上がりと独善に満ちたものであつたと思つ。

アジアが眼覚めていないから、日本が音頭をとつて自覚を促し、民族独立を行つて手を携えて行こうと  
 すること自体、日本的偏見であつたのではないかと思つ。「よけいな御世話ではないか」との反省がなく、  
 それが正しいことだと思ひ込んだ。善意の押し売りという感じがなではない。また、善意は必ず通じ理解  
 されるといふこと自体、日本的発想であつたのであるが、これが「アジアは一つなのだから、どこにで  
 も通じる」と思つるところが偏見となつていふことに、氣が付いていなかった。いや今日でも、この  
 「善意は必ず通じる」といふ発想、思ひ込みがあるのではないかと感じてゐる。

音頭をとり、欧米の野望を粉碎し、それを駆逐したのだから、当然、日本はアジアの盟主であると思つ  
 てくれるであらう、という期待があつたのだと考へられる。善意で善政（と日本が考へる）を敷けば、王  
 道楽土となつて喜んでもらえるし、「アジアは一つなり」なのだから日本の考へ方がアジアに通じる、と  
 いう見方があつたと言つてよい。たしかに欧米を駆逐したプロセスとしても結果としても、が、そ  
 のあとの行動そのものが前述のように偏見に満ちたものであつたが故に、逆に大きな恨みを買つてゐるの  
 である。タテマエはいざ知らずホンネでそう思つてゐる人もかなりいると思つが、口に出せる時世でない  
 から黙つてゐるのである。少なくとも一般の庶民においてである。理由は、他國の人々のもの考へ方、

感じ方、国民性が全く理解されていなかったためということに気づいていない。これに類した偏見は、今日の対外関係においても行われているのではないかと感じている。

日本人に思い込みの傾向が強いことは、十分注意してよい。国際場裡における日本の立場に対する日本人の思い込みは、かなり大きいように思う。一言にして尽せば、自国・他国の国民性の不理解に基づく偏見である。

環太平洋連帯構想は、こうした思想に基づくものではないことは解っている。アジアのみでなく、環太平洋というところが全く異なっている。こうした広い場においてものを考えて行く　アジアは一つという発想ではない　ところが大事な点である。広い場を考えて共栄をはかるということになれば、その考え方はおのずと異なり、国際相互理解という立場に立つものである。こうなると、実際にこの運動を推進する基本としては、偏見なき情報の構築ということになる。このために国民性の知見は非常に大事なことになる。そればかりではなく、これに加えて大平正芳記念財団の行っている活動は、素晴らしい情報となると思う。こうした積み上げられた成果が正しく活用されるべきであるが、活用すべき日本のリーダーの人々に、前述のように偏見や善意でやれば通ずる、「悪いのは自分の方だけだった」と客観的な分析もなしに、ひたすら情緒的にあやまれれば許してもらえうまく行く等の態度を持ち、国民性無視の考え方が多いのではないかとおそれている。

これに気がついてもらうためには、研究成果の積み上げばかりでは駄目で、立ち入った問題についての討議討論を繰り返す必要がある。形式的なシンポジウムではなく、インフォーマルな自由な議論ができることが望ましい。日本においては、遠慮が先に立ち、綺麗ごとを終始し、表面的なタテマエに酔ってしまふことが多く、はなはだ困難なことであるが、これが実現され研究成果が一層偏見のない人々に活用されて、環太平洋連帯構想が実現されて行くことを願ってやまない。

## 相互理解の構造分析と過程の解明を

最後にもう一つつけ加えたい。連帶構想の根本の柱は、相互理解であることは前に述べた。この相互理解の内包を、もう少し詳しく研究することも必要と思う。相互理解は一人角力では事は叶わない。日本を土台にして考えてみよう。相手の国が日本を理解しようとしない限り、これは不可能なことである。どういふ場合に理解しようと思ふであらうか。純粋な立場から日本を理解しようと思ふ、ということも勿論ある。こればかりではない。日本の経済力が強まり、日本を理解しようとしなければならなくなる、あるいは理解しようと思ふようになってくることもある。文化、たとえば芸術や思想や学問を知りたい、理解しようと思いたくもなることもある。また、理解しなければ損であるということもあるし、理解することによって自分が得になるといふ勘定もある。このような気持を起こさせるきっかけをいかにして提供するか、気持が起こったとき、理解し易いような材料を用意しておくことも、研究しておかねばなるまい。

一方、日本が相手を正しく理解することとなると、これまた難しいことは前にも述べた。いいかえると、歪んだ外国観である。どうしてこれが生じているかを分析しなければ、今後同じことが繰り返される。これは、有史以来の文化受容、とくに明治以後の文化受容の問題に根ざしているものと思う。外国文化を摂取するには、外国文化の正しい理解はそれほど重要ではない。外国文化の中から何かを汲み取つて、それを糧にして我々の文化を作りかえることができればよいわけである。自らを富ましめるための刺戟と考へればよいわけである。理想化、心酔型の文化受容、曲解型の文化受容でも、我々の文化を富ましめ、豊かなものにできれば、それはそれでよかつたわけである。正しい理解が不可欠の條件でなかつたのである。外国文化の解釈がどうであれ、自らの豊かな文化の発展に資すればよいということになる。これが、意識

的にではなく、強く意識せずに行われてきたことは否めない。こうして、外国理解の不知不識のうちに生じた理想化、誤解、曲解などが起こるのである。追いつけ、追いつけのうちにはよかったが、相互理解となると、こういう態度ではとんでもないことになる。相互理解は従来型の理解ではなく、透徹した見方に立つ理解でなくてはならなくなる。日本人にとっては、このあたりのところから考え直して行かなくてはならない。つまり、突込んだ分析がされねばならないところである。

一口で言えば、彼我の相互理解の構造分析と相互理解の過程の解明が先行し、この上に立つ相互理解のあり方、材料・データ作りがなされねばならないと思う。連帯構造の仕上げのために、こうした考えの上に立つ研究と実践も必要でないかと思う。

(統計数理研究所名誉教授)